

2010年5月25日

米子市長 野坂康夫 殿

社団法人 日本建築学会中国支部
支部長 杉本俊多

米子市公会堂の保存に関する要望書

拝啓 時下益々御清祥のことと御慶び申し上げます。

日頃より本会の活動につきましては御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、貴市では、先般実施されました耐震診断の結果を受け、米子市公会堂の使用停止を決定され、存廃を検討されていることを聞き及んでおります。

御存知の通り、米子市公会堂は、近代日本を代表する建築家の1人である村野藤吾(1891-1984)の設計により、1958年に完成しました。鉄骨鉄筋コンクリート造(一部鉄骨造)、地下1階、地上4階建て、現場監理を米子の桑本建築事務所(現桑本建築設計事務所)、施工を鴻池組が担っています。

米子市公会堂につきましては、別紙「見解」に示しました通り、1958年の竣工時のみならず、1980年に行われた増改修においても村野藤吾が設計を手掛けており、創建当時の外観を極力損なうことのないよう、慎重にかつ計画的に増改修が実施されています。同一の設計者によって同一の建築作品の増改修が行われた事例は、全国的に見ても極めて少ないことから、良好な保存状態が維持されていることと併せて重要な建築史的価値が認められる建物といえます。

その完成当時は、山陰随一の名ホールと呼ばれ、先頃「公共建築100選」に鳥取県で唯一、山陰両県でも文化ホールとしては、ただひとつ選定を受けていることから、今なお山陰を代表する名ホールであることが高く評価されています。その建設には米子市民自らの「1円募金運動」による多大な寄付も寄せられており、まさに「市民手作りの文化の殿堂」と呼ぶにふさわしいものです。米子の歴史と文化を象徴する記念碑として、後世に伝え、残すべき高い歴史的価値を有する建物に他なりません。

以上のことから、貴市におかれましては、この貴重な建物の持つ文化的意義と歴史的価値について改めて御理解をいただき、是非存続に向けて御検討いただくと共に、このかけがえのない文化遺産の価値を最大限に考慮した保存改修を行っていただけますよう、格別の御配慮を賜りたくお願い申し上げます。

なお、日本建築学会中国支部としましては、米子市公会堂の存続に関して、出来る限りの御協力をさせていただき所存であることを申し添えます。

敬具

2010年5月25日

米子市公会堂についての見解

社団法人 日本建築学会中国支部
建築歴史意匠委員会
委員長 松本静夫

鳥取県米子市角盤町2丁目61に建つ米子市公会堂は、角盤高等小学校（1945年廃校）の跡地に市制30周年の記念事業として1958年に竣工した。「1世帯が毎日1円を貯めて公会堂を」という米子市民自らの「1円募金運動」による寄付も寄せられて完成した、米子市民待望の施設であった。

鉄骨鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）、地下1階、地上4階建て、建築面積2,550㎡、延床面積4,872㎡である。設計は、近代日本を代表する建築家である村野藤吾（1891-1984）が手掛け、現場監理を地元米子の桑本建築事務所、施工は鴻池組が担当した。

敷地面積11,487㎡となる敷地は、国道9号線と国道181号線の交わる角地、米子の「街の顔」ともいべき一等地である。その角地は広場と駐車場に充て、市民に対するオープンスペースとする。ブラジルのキリスト教会堂とグランドピアノのイメージを投影したという大ホールは、その形状が外観にそのまま表現され、交差点とは対角の敷地奥に配される。事務所、集会室などを内包した管理棟は国道9号線に直交し、敷地南東側、大ホール後方を貫く形で直方体状のヴォリュームが挿入されている。観客は、広場を介して大ホール正面入口へと誘い、一方、事務職員、集会室の利用者、演奏者などは管理棟から内部へと導く。観客とそれ以外の動線を明確に分離する建物配置計画は機能的かつ合理的であり、極めて秀逸といえる。

1980年には、ホールとしての機能を大きく改善する増改修が施された。この時の設計も村野藤吾が担い、竣工時のたたずまいを極力損なうことのないものとされた。以降は目立った増改修は行われておらず、一般的なメンテナンスを施しながら竣工時の外観が極めて良好な状態で維持されている。

なお、1998年には、地域社会への貢献度が高く、優れた公共建築のひとつとして鳥取県内では唯一「公共建築100選」に選ばれている。

米子市公会堂の持つ、建築史的価値、歴史的価値は以下の各点で認められる。

1. 近代日本を代表する建築家である村野藤吾の手掛けた建築作品である。

米子市公会堂の設計者である村野藤吾は、1984年、93歳で没するまで創作意欲を失うことなく、70年近くの長きに渡って建築家として活躍した。その建築活動の功績として、通

算 3 度に渡る日本建築学会作品賞（丸栄百貨店／1954 年、世界平和記念聖堂／1956 年、日本生命日比谷ビル／1965 年）、日本芸術院会員（1955 年）、文化勲章（1967 年）など、その受賞・受章の数々は、同氏が近代日本を代表する建築家の一人であることを裏付けている。

逝去後も手掛けた建築作品の建築史的価値としての評価は極めて高く、宇部市民館（現宇部市渡辺翁記念会館、1937 年）が 2005 年に、世界平和記念聖堂（1953 年）が 2006 年に、その増築を手掛けた高島屋東京本店（1933 年）が 2009 年にそれぞれ国指定重要文化財に指定されている。加えていえば、近代建築で初めて国宝に指定された旧東宮御所（現迎賓館赤坂離宮、1909 年）の改修工事（1968—1974）にも関与している。

特に米子市公会堂において、その建築史的価値が認められるのは、1958 年の竣工時と 1980 年の増改修の 2 度に渡って村野藤吾が関与していることであろう。その増改修は、舞台上部の増設、冷暖房の整備、反響板の設置など、主として大ホールの機能拡充を中心に、楽屋・リハーサル室の増築や元は打放しであったコンクリート部分へのペンキ塗などが施されている。特に楽屋・リハーサル室は、大ホールの後方に増築されており、竣工時のたたずまいを極力損なうことのないように慎重に、かつ計画的に行われている。一方で、ホワイエやテラスの手摺など、この増改修にて新設された箇所も認められ、ホール出入口に取り付けられたアクリル製のドアハンドル、ホワイエに吊るされたペンダント照明など、竣工時から残る箇所との新旧の対比を示す。原寸図を描き、度重なる検討の末に生み出された村野藤吾の細部意匠の数々は「村野好み」とも形容されるほどで、米子市公会堂では、約 20 年に渡る新旧の「村野好み」が併存し、その対比が見られることでも、高い建築史的価値が認められるところであろう。

建造物の保存再生の事例が全国的に増えつつある昨今にあっても、同一の設計者によって同一の建築作品の大規模な増改修が手掛けられた事例はあまり知られていない。特に、戦後活躍した建築家であれば、磯崎新（1931—）が大分県立図書館（1966 年）を改修してアートプラザ（1997 年）へと再生活用した事例が知られているくらいである。その点を踏まえれば、米子市公会堂は、文化財の歴史を顧みる上でも貴重な事例であることが認められるだろう。

2. 村野藤吾の多彩な作風の変容の過程を示す建築作品である。

年月を重ね、経験を積み、その作風に変容が生じていくのは、いかなる建築家にも共通していえることだが、中でも村野藤吾は、その多彩な作風でよく知られている。建築家としてのデビュー作である森五商店東京支店（現近三ビルディング、1931 年）では、逸早く後のモダニズムの先駆けとなる作品を実現し、完成当時世界的な建築家として名声を得ていたブルーノ・タウト（1880—1938）にして「永遠の価値を持った優秀なファサード」と絶賛を受けたことは有名である。その一方で、和風建築を手掛ければ、戦後における数寄屋建築の傑作である佳水園（現ウェスティン都ホテル京都佳水園、1959 年）を完成させ、

また、その一方で、晩年へ向かうほど、モダニズムの潮流とは一見反するかのようになり、細部に手間暇を加えた手工業的な造作を施し、日本生命日比谷ビル（日生劇場、1963年）など、数々の名作を残している。

村野藤吾の作品の数々は、建築関係者にとどまらず、一般の建築愛好者にまで広く親しまれている。その評判は階段やその手摺など、円熟味のある艶やかな細部意匠でひととき高いもので、「建築をつくる」ことへの真摯な姿勢が、今なお我々に強い感動を与えるのであろう。時に、それは同氏が、機能性や均質性、経済性、合理性などで形容されるモダニズムとは異なる、それこそポストモダニズム的な建築家であったとさえ思わせるほどである。

さて、米子市公会堂においては、大ホールの形状が外観にそのまま映し出され、客席後部を軽快に迫り上げたその下部にホワイトエを納める。客席を支える柱、そして梁は建築構造をそのままに投影する「ストラクチャル・デザイン」として、モダニズム建築に特有のダイナミックな構成美を表現する。公会堂建築にとって必要不可欠なもののみを抽出し、構成するとこうなるのだろう。質実剛健ともいうべきたたくまいに見出せるのは、機能性、そして合理性である。モダニズムを形容する言葉そのものであるそれは、一見、モダニズムという時代の潮流から距離をおいているかのような錯覚を覚える村野藤吾という建築家が確かにモダニストであったことを伝えている。

その一方で、屋根や側壁の緩やかに湾曲した造形表現、特にこの地方特産の赤褐色釉瓦をタイル型に焼成したもの（暗紫褐色の塩焼タイル）を採用していることは、街に対して柔らかで、かつ個性的な表情を紡ぎだすことに貢献している。村野藤吾は、世界平和記念聖堂（1953年）で現地の砂を含んだセメントレンガを採用し、米子市公会堂に先駆けた事例を手掛けているが、こうした風土性を尊ぶ姿勢は、本来モダニズムが排除してきたものであり、同時に、後のポストモダニズムに通じる先見性を示している。

以上のことから、米子市公会堂は、後に1960、70年代へと、次第にモダニズムとは一見隔絶したものへと独自の展開を示す村野藤吾の作風にあって、その変容の過程を示す建築作品のひとつとしての価値が見出せる。

3. 山陰随一の名ホールとして、米子の歴史・文化を伝える記念碑である。

米子市公会堂は、市制30周年の記念事業として建設された。公会堂の建設は戦前より米子市民が強く願っていたことで、建設費用に充てるために「1世帯が毎日1円を貯めて公会堂を」という米子市民自ら展開した「1円募金運動」が公会堂建設における直接の契機になったという。一般からの寄付約1673万円に、県内法人ならびに県外からも寄せられた総計約5243万円（大学卒初任給の比較によって現在価格に換算すれば約7億円）を加えた総工費約1億7500万円（現在価格で約23億2750万円）をかけて1958年に竣工した。まさに「市民手作りの文化の殿堂」と呼ぶにふさわしいものであった。

設計は村野藤吾が担ったことは先述の通りだが、建設の過程では現場管理に地元米子の

桑本建築事務所（現桑本建築設計事務所。かつて村野の下で事務所所員であった桑本真太郎が主宰）が村野を助け、また、広場に設けられた「平和の泉」と名付けられた噴水の中央には、郷土出身の彫刻家である辻晋堂（1910－1981、京都市立美術専門学校（現京都市立芸術大学）教授）が制作したブロンズ像が据えられた。米子市公会堂のたたずまいに景を添えると共に、市民に憩いの場を提供している。このように米子市公会堂の完成には、地元米子からの多くの支援が不可欠であった。

また、完成当時から山陰随一の名ホールとして知られ、1998年には、地域社会への貢献度が高く、優れた公共建築のひとつとして鳥取県内で唯一、山陰両県を通じてただひとつの文化ホールとして「公共建築 100 選」の選定を受けており、その評価は全国的水準にあることが示されている。

以上のことから、米子市公会堂は優れた建築史的価値を有するだけにとどまらず、米子の歴史と文化を今に伝えるという、米子市における記念碑としての歴史的価値が多分に認められる。